◇ 国　語

国 2－1～国 2－20 まで 20 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇一九年に発生した新型コロナウイルスのパンデミックをきっかけにして、文化と病の関係を多面的に考えること、そのために病の文化史を改めて回顧してみること、それが本書の狙いです。もとより、それは新書一冊で書くには途方もないテーマですが、本格的な論考に入る前に、思考のルートをあらかじめホソウ[A]しておくことも無益ではないでしょう。

(一)それにしても、病とは何でしょうか。私なりに説明するならば、それは世界の現れ方を変えるものです。疫病が蔓延(まんえん)すると、それまで楽しみの場であったレストランや観光地が、とたんにリスクに満ちた危険な場に変身する。あるいは個人に即しても、発病したとたん、ふつうならば難なくできたことに多大な困難が生じる。馴染みのあった社会環境が、急に親しみを欠いたとげとげしいものへと変わり、精神の伸びやかな活動が心身の不調のために大きく制約される――このような負の異化作用が、病のもたらす現象的な変化だとひとまず言えるでしょう。

では、そのような病はいったいどこからやってくるのでしょうか。われわれはふつう、病気（病原菌）が人間のなかに入ってくると考えます。それは病気を無遠慮なエイリアンやインベーダーと見なすことと同じです。政治家たちは「新型コロナウイルスとの戦争」という威勢のよい言い方を平気でしますが、それはまさにこのような思考様式から生じるものです。

しかし、(二)人間中心的な見方を反転させれば、どうなるでしょうか。ウイルスを中心とするならば、むしろ人間が病気のなかに入っていくと言うべきではないでしょうか。現に、エイズウイルス、鳥インフルエンザウイルス、新型コロナウイルス――これらの新型ウイルスとのソウグウ[B]は、いずれも自然界に対する人間のアクションに起因するものです。ウイルスが能動的に人類を侵略したわけではありません。

現代フランスの思想家フランソワ・ダゴニェは「基礎的で新しい考え方、それは、私たちは病気のなかに取り込まれているという発想です。病気は外界からやってくるだけではない。私たちは病気に参加している」と述べています。これは洗練された考え方です。私たちの誰もが、いつかは病気の環境に入り込み、死を迎えます。問題は、この「いつかは」にあります。それは

すぐかもしれないし、遠い未来かもしれない。病の環境は常に人類を取り囲んでいる反面、個々人がそれにいつ参入するか（いつそこから離脱できるか）は確定していないのです。

この時間的なあいまいさはパンデミックにも深く関わっています。象徴的なことに、二一世紀の大きな事件には「日付」の別名が与えられてきました。二〇〇一年のアメリカ同時多発テロは「九・一一」、二〇一一年の東日本大震災は「三・一一」という具合です。ここには、特定の瞬間に生じた決定的な出来事が、社会を一変させたというニュアンスがあります。(三)それはいわば負の創世神話と呼べるでしょう。二一世紀の神話の主人公はもはや神でも英雄でもなく、日付によって「始まり」を特定された事故や災害なのです。

ア　、パンデミックはそれらとは異質です。パンデミックとはまさに日付のない出来事です。そこには明確な「始まり」や「終わり」がありません。ウイルスや病原菌との接触というカッコつきの《創世》の瞬間は必ずあるわけですが、それを特定することは困難であり、しかもこの謎めいた創世記がいつ収束するのかは見当もつかないのです。

興味深いことに、アルベール・カミュの小説『ペスト』では、ペストに占領されたアルジェリアのオラン市の老警手(注)が、こう呟きます。「こいつが地震だったらね！　がっと一揺れ来りゃ、もう話は済んじまう……。死んだ者と生き残った者を勘定して、それで勝負はついちまうんでさ。ところが、この病気の畜生のやり口ときたら、そいつにかかってない者でも、胸のなかにそいつをかかえてるんだからね」。一撃では「勝負」がつかず、長期にわたってじくじくと作用を及ぼし続ける――それこそが疫病の本質と言うべきでしょう。

(四)カミュの『ペスト』は一九四七年に刊行されてフランスでは熱狂的に迎えられましたが（ちなみに、日本の小林秀雄も一九五〇年に『ペスト』を論評し、カミュの厳密な書きぶりに「凡(すべ)てが驚くほど明瞭な批評精神によって計量され尽した末に成った新しいメカニスム」を見出しています）、それはナチスに対するフランス人のレジスタンスの記憶がまだ鮮明であった時期です。カミュはこの小説を抵抗運動の寓話として書こうと意図していました。オラン市の医者リウーらに、横暴な占領者に対するレジスタンスの姿を重ねることは十分可能です。

その一方、カミュは疫病のもたらす［イ］な時間感覚も、たいへん厳密に描き出しています。『ペスト』が単純なレジスタンス小説の枠に収まらないのは、この時間の描き方の特異さゆえです。ペストは当初オランの市民たちに一種の興奮をもたらしますが、隔離生活が長引くなか、それはやがて倦怠へと変わっていきます。ペストという「大きな災禍」は猛火のような派手なクライマックスではなく、むしろ底知れぬ「単調さ」を呼び覚ましたのです。

> みずからペストの日々を生きた人々の思い出のなかでは、そのすさまじい日々は、炎々と燃え盛る残忍な猛火のようなものとしてではなく、むしろその通り過ぎる道のすべてのものを踏みつぶして行く、はてしない足踏みのようなものとして描かれるのである。

> まったく、ペストは、疫病の始めに医師リウーの心を襲った、人を興奮させる壮大なイメージとは、同一視すべき何ものももっていなかった。それは何よりもまず、よどみなく活動する、用心深くかつイロウのない、一つの行政事務であった。

こうして、ペストは文字通りの間延びをもたらします。住民たちはペストに占領されただけでなく、麻痺した時間に占領されたのです。人間を空間的のみならず時間的にも「監禁」する疫病を、あえて「行政事務」に通じる客観的な文体で描き出すこと――そこにカミュの創意がありました。

余分な装飾を排したカミュの記述は、日付をもたないパンデミックの特性を実によく捉えています。パンデミックは急激なスピードで社会を変化させる一方、その終わりの［ウ］性ゆえに、時間を膠着させるものです。疫病の恐怖は、あれよあれよという間に加速していく時間だけではなく、いつ終わるともしれない単調で平凡でけだるい時間をも作り出します。[五] パンデミックの占領下では、時間はあまりに速く過ぎ去り、かつあまりに遅く進むのです。それは社会の正常なカレンダーを解体するものですが、私たちはこの異常事態にもやがて慣れてしまう。「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪いのである」

という『ペスト』の戒めは、傾聴に値するでしょう。

(六)このような間延びや倦怠にひとたび占領された人間たちは、たとえ疫病を克服できたとしても、無邪気に凱歌(がいか)をあげるというわけにはいきません。『ペスト』はひとまず全体主義に対する勝利の物語として締めくくられましたが、カミュ自身はそこに安住できませんでした。批評家の福田和也が言ったように、『ペスト』の後のカミュはむしろ「苦渋の色濃い『転落』へと移行することで、『敗北』の文学に足を踏み入れ」ることになりますが、その予兆はすでに、オラン市の住民を支配した「はてしない足踏み」に示されていたように思えます。

カミュが巧みに描いたように、疫病はしばしば、われわれの時間を感受する能力をすっかり摩耗させるほどに、長く続きます。超スピードの変化とけだるい無変化は、うまく人間の認識に落とし込めないのです。それと同じように、病と文化の関係も、目もくらむほどに長い期間にわたっていて、それを整然とした歴史認識に変えることは困難です。病は人類史にヘンザイしており、文化的な制作物は大なり小なりその影響を受けています。その全てをモウラすることは、誰であれ不可能でしょう。

(福嶋亮大『感染症としての文学と哲学』による)

注　老警手　年老いた警備員

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　ホソウ

①大型テンポに行く　②秋の古都をマンポする
③ホケンの外交員　④損失をホテンする
⑤敵国のホリョとなる

1

B　ソウグウ

①結婚相手をハイグウシャと呼ぶ　②イチグウにつどう人々
③不幸なキョウグウ　④仮住まいをグウキョという
⑤リュウグウ城は海の底

2

C　イロウ

①イロウ会を催す　②イシツ物係
③イケン交換会　④ケイイを説明する
⑤武力でイカクする

3

D　ヘンザイ

①ヘンシン願望　②ヘンコウ報道
③ヘンシン用封筒　④ヘンゲン隻語
⑤ヘンレキを語る

4

E　モウラ

①モウマクの機能　②猪突モウシン
③誇大モウソウ　④ケイモウ思想
⑤モウボ三遷

5

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①したがって　②なぜなら　③しかし　④あるいは　6

イ　①絶望的　②圧倒的　③麻痺的　④客観的　7

ウ　①予測不可能　②異常事態　③遅延　④絶望　8

問三　傍線部（一）「それにしても、病とは何でしょうか。私なりに説明するならば、それは世界の現れ方を変えるものです」とあるが、筆者の考える「病」のもたらす変化として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ　9

①レストランや観光地が、リスクに満ちた危険な場所であるという誤った認識が広がるということ。

②病が発症したとたん、平常時は許されていた行為が、権力によって大きく制限されてしまうということ。

③これまで馴染みのあった社会環境が、親しみを欠いたとげとげしいものに変化するということ。

④精神的に伸び伸びできる社会環境が失われ、健康な心身も不調に見舞われるということ。

問四　傍線部（二）「人間中心的な見方を反転させれば、どうなるでしょうか」とあるが、筆者が主張する「病」のとらえ方とは異なっているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

10

①病気（病原菌）が人間のなかに入ってくる
②人間が病気のなかに入っていく
③私たちは病気のなかに取り込まれている
④私たちは病気に参加している

問五　傍線部（三）「それはいわば負の創世神話と呼べるでしょう」とあるが、「負の創世神話」の意味としてふさわしいものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

①特定の日付を持った出来事によって、社会の終末がもたらされたという伝説のこと。
②特定の日付を持った出来事によって、歴史の終わりがおとずれたという物語のこと。
③特定の日付を持った出来事によって、従来の価値観が不可逆的に変化したという認識のこと。
④特定の日付を持った出来事によって、神でも英雄でもない主人公が現れたという事件のこと。

問六　傍線部（四）「カミュの『ペスト』は一九四七年に刊行されてフランスでは熱狂的に迎えられました」とあるが、それはなぜだと考えられるか。理由としてもっとも適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①アルジェリアを占領したペスト菌の流行が人々の記憶に鮮明に残っていたから。
②フランスの横暴な占領に対するアルジェリアの人々の抵抗運動が問題意識としてあったから。
③ペストへの抵抗がナチスに対するレジスタンスの経験と重なり、物語を共感させたから。
④作者がフランスのレジスタンスの寓話としてこの作品を書こうとしたことが批判を呼び起こしたから。

問七　傍線部（五）「パンデミックの占領下では、時間はあまりに速く過ぎ去り、かつあまりに遅く進むのです」とあるが、筆者が主張するパンデミック下の時間のとらえ方とは異なっているものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①ペストは燃え盛る猛火のようなものであるが、やがて勢いが衰えて平凡でけだるい日常が回復する。
②ペストという災禍は人々を興奮させるが、やがて通り過ぎるものすべてを踏み潰してゆく単調さをもたらす。
③住民たちはペストに占領されただけではなく、やがて疫病の恐怖にさらされ続けることにも慣れてしまう。
④疫病の恐怖は急激に社会を変化させるとともに、いつ終わるともしれない単調でけだるい時間を作り出す。

問八　傍線部（六）「このような間延びや倦怠にひとたび占領された人間たちは、たとえ疫病を克服できたとしても、無邪気に凱歌をあげるというわけにはいきません」とあるが、このように筆者が主張するとらえ方とは異なっているものを、次の①～④の中から一つ選べ。　14

①パンデミックには明確な始まりと終わりが存在しないため、疫病への勝利を宣言することはできないということ。
②最初の一撃では勝負がつかず、長期にわたって社会に影響を及ぼし続けるのが疫病の本質であるということ。
③ペストの災禍はすべてのものを踏みつぶして行く、はてしない足踏みのようなものであるということ。
④ペストを全体主義にたとえ、純粋な勝利の物語として描くことで、カミュは苦渋の選択を強いられているということ。

問九　本文の内容と異なるものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。　15・16

①わたしたちの誰もがやがて病気の環境に入り込むが、いつ死を迎えるか離脱できるかは分からないのである。
②パンデミックは社会に決定的な変化を生じさせ、《創世》の瞬間によって始まりを特定された現代の神話である。
③カミュの『ペスト』ではアルジェリアのオラン市の警手が、ペスト禍は地震よりも影響が長期化すると語っている。
④カミュの『ペスト』はナチスに対するフランス人のレジスタンス運動を想起させる抵抗運動の寓話として書かれた。
⑤人間を時間的にも空間的にも監禁する疫病を「行政文章」のような皮肉な文体で描き出すところにカミュの創意があった。
⑥「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪いのである」とする『ペスト』の戒めは、現代の我々にも警鐘を鳴らしている。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

本書では、ある〈見えざる光〉を、主に二〇世紀の日本社会に照らし、そこから見えてくる光景を観察してきた。そしてその不可視光線が通る社会的・文化的な「媒質」は時代によって変化し、紫外線は時代とともに「屈折」してきたことを確認した。紫外線という不可視光線には、社会のある側面を可視化する力があるといえるのではないだろうか。

このような変化は、人類が長い間付き合ってきた、極めて日常的な存在である太陽光線との関係の変容でもあった。日差しを浴びることは、時には健康のためであり、時には健康に有害な行為であり、時には美容の敵であり、時にはステータスシンボルでもあったのである。

このことは、(一)われわれが体で覚えているような身体感覚が、実は不変的なものではないことを物語っている。栗山茂久らは、人々の身体感覚は生物学的な要因だけで決まるのではなく、そこには社会的な要素の影響を受けながら変容していく［ア］も存在すると述べている。同様のことは、時間感覚についても、また虫との関係についても指摘されている。

ところで、身の回りに存在する自然に対する認識や態度は、人間が自然を知るための科学、そしてそれを利用するためのテクノロジーと関係しているはずである。紫外線をめぐって、まずは科学・技術の領域について検討してみよう。

紫外線は、ここまで見てきたように〈衣食住〉のすべてと関係しているため、本書では医学や栄養学、物理学や化学のような科学分野、そして化粧品や養鶏、電機やガラス、さらには建築などのテクノロジーが登場してきた。

これらの多くは、太陽光線と人間との距離を測るためのサイエンスであり、またそれを［イ］にコントロールするためのテクノロジーであったといえる。本書で見てきたように、人々はその〈測定結果〉に反応しながら、それぞれの時代の［ウ］のテクノロジーをクシして、(二)場合によっては太陽光線を遠ざける技術を、そして場合によってはそれを引き寄せる技術を作ってきた。

本書で紹介した過去の姿の中には、二一世紀初頭の観点からは理解に苦しむものもあるかもしれない。カーターによると、一九二〇年代後半には『イギリス紫外線療法ジャーナル British Journal of Actinotherapy』も創刊され、紫外線療法を専門化しようとする動きもあったが、結局この流れは医療の主流にはならなかった。一方でリバーマンは、抗生物質の発見以降、薬物療法が広がり、「太陽療法」には「インチキ万能薬」というイメージが付いたのではないかとも述べている。

ところが、一九二〇年代からの約半世紀間は、当時の一流の科学者や大手企業、そして当局やジャーナリズムも紫外線による医療や保健などに関心を示していた。その〈一流の科学者〉の一人、本書でも登場した物理学者の寺田寅彦は、一九一五年ごろのエッセー「科学上における権威の価値とヘイガイ」で、光を粒子と見なしていたニュートンの事例などを挙げながら、[11]「科学上の権威」の考えも後代にはそれが「誤り」になる可能性があることを説明している。逆に言うと、〈科学の常識〉の変化こそ、その間に科学が発展してきたことの指標になるかもしれない。科学史家の中根美知代らは、『科学の真理は永遠に不変なのだろうか――サプライズの科学史入門』で次のように述べている。

> 歴史を意識して科学の理論を見ていくと、面白いことが分かります。それは、今、正しいと考えていること、教えられていることが、未来永劫に正しいとは限らないということです。
>
> これからも科学が発展しつづければ、数百年後の科学者が二一世紀の科学から「誤り」を見つけることは、それほど難しいことでもないかもしれない。科学知識が常にコウシンされてきたために、過去の一流の科学者が現在の〈科学的な常識〉とは違う考え方を持っていたとしても、それは特に不思議なことではないのである。このような意味で、本書では〈発見の年表〉より少しは豊かなストーリーを描いてきたつもりである。太陽とわれわれとの間には、万華鏡のような世界が広がっていたのである。

太陽と人間との関係について、序章で言及した〈第一の境界〉(注)（地球の大気）と〈第二の境界〉（人工的な衣・住環境）をめぐっては、現代文明に対する価値観を見ることができる。主に第3章で確認したように、人工的な環境が健康に「有益」な紫外線を〈さえぎってしまった〉とされた時代には、それに対する反発として生活に紫外線を取り戻そうとする動きがあった。逆に、第4章で確認したように、現代技術文明が環境破壊によって「有害」な紫外線を〈透してしまった〉とされる時代になると、今度はその対策として、冷蔵庫の冷媒などで生活に便利さをもたらしていた人工物であるフロンや紫外線を生活環境からハイジョしようとする動きが見られるのである。

このように、紫外線をめぐる言説からは、それぞれの時代における環境問題認識や自然観を読み取ることができる。(四)不可視光線の紫外線が、その変化を可視化してくれるのである。

ところで、紫外線に対する価値観には、上述のようにそれぞれの時代における〈現代文明批判〉的な要素が含まれているといえるのだが、一方で紫外線に対する〈第三の境界〉（人体の皮膚）をめぐっては、「文明」言説に関するもう一つの側面も見えてくる。

不可視の紫外線は人々の肌に可視的な痕跡を残しており、これが社会的・文化的、さらには政治的に解釈されてきたのも事実である。特に第3章でも確認したように、かつての帝国主義的な「文明のヒエラルキー」の中心地から主に発信されてきた紫外線言説は、「人種」言説とも無関係ではなかったのである。

セグレイヴによると、一九世紀末から船員や警察官、農民など、屋外で長時間働いている人々に「船乗りの肌」という症候が観察されており、紫外線は人々の肌に職業、または階級を可視化するヒョウショウを刻み込んできたことになるが、さらには皮膚がんなどと関連しては「白人の肌」が言及されることもあった。フロインドやマクドウェルも、近年のアメリカやオーストラリアなどで、ビタミンD不足の問題と関連してエスニシティが言及されている事例を紹介している。

紫外線対策をめぐって、太平洋の向こう側の動きに対して、日本では「先進国」を見習うべきだという意見が見られる一方で、

「皮膚色の違い」というフィルターが働いている様子もうかがえる。一九七五年、『厚生福祉』誌上でアメリカにおける動向を紹介した記事（「今夏のレジャーに異変か　日光浴有害説」）では、「白色人はわれわれ日本人と違って色素が少ないため皮膚が弱いせいか、日光浴が有害だという説が流れ出して」きたと述べていた。また、「日本人と違い米国人には皮膚がんが多いことは事実である」としつつ、「白色人と有色人の間には日光に対する体質的な相違があって、われわれ日本人は彼らほど日光の害（とくに皮膚がん）を敏感にうけとめる必要はないのではないか」ともコメントしていた。そしてほぼ四半世紀後の一九九九年の記事「母子手帳から『日光浴』の消える日」でも、「欧米（白人）における皮膚がんの罹患率」が高いことを紹介しながら、「外国（白人）のデータからものを言うことは危険」であると主張していた。

このように、ここでは「白人」を基準として、それとは違う「有色人」としての「日本人」を比較しているのだが、前出の環境省の「紫外線環境保健マニュアル二〇一五」でも、「日本人をはじめ有色人種では紫外線の皮膚がん発症への影響は白色人種に比べると少ないことがわかっています」と紹介しつつ、その一方で「皮膚色の薄い欧米人と比べて、皮膚色の濃いアジアやアフリカの人々がビタミンD欠乏症に陥りやすい事は良く知られています」とも説明している。

医学に対して［　エ　］である筆者には科学的な「事実」を吟味する能力はないが、少なくとも紫外線（について語ること）[五]がいわゆる「人種」に対してニュートラルではない様子はうかがえる。第3章でも紹介したように、近年の人類学では「人種」という概念が生物学的に有効ではなく、むしろ「社会的構築物」であると強調していることを考えると、「人種」という言葉には注意が必要だろう。近年の科学史研究では、知識が形成される社会的・文化的な［　オ　］にも注目している。

（金凡性『紫外線の社会史』による）

＊出題者注　〈第一の境界〉〈第二の境界〉〈第三の境界〉に関して、著者は「序章」において次のように述べている。

①地球の「衣服」

まず、太陽からの紫外線の多くは大気に吸収されることになり、これが紫外線に対する〈第一の境界〉となる。そのためか、オゾン層を「地球の皮膚」、さらには「地球の保護服」にたとえる表現も見られる。興味深いことに、衣服は以下で述べる第二の境界、皮膚は第三の境界に該当する。

②人工的な衣・住環境

人類のほとんどは人工的な空間の中に居住しており、さらに現代においてはその多くが仕事も人工的な室内空間の中で行っている。本書で確認することになるが、「透明」なはずのガラスも多くの場合は紫外線に対して透明とはいえず、このような人工的な住環境は紫外線に対する〈第二の境界〉となる。

そして人類のほとんどは室外空間では衣服を着用しており、これも〈第二の境界〉の一つだといえる。その他、日傘や帽子、サングラスや日焼け止めクリームなど、人々が身に付ける様々な人工物もここに含めることができる。このようなファッションは、紫外線に対する価値観が可視化される場となる。

③人体の皮膚

人体の表面では皮膚、特にその中のメラニン色素が紫外線を吸収することになっており、これが〈第三の境界〉となる。紫外線は目に見えない存在だが、目に見える形でその痕跡を人間の肌に残すため、皮膚は紫外線との付き合い方が可視化されるキャンバスにもなる。

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　クシ

①左右のクベツがない　②イク同音
③緻密なサイク　④害虫をクジョする
⑤悪戦クトウ　17

B　ヘイガイ

①キュウヘイを打破する　②店をヘイサする
③天皇ヘイカ　④富国キョウヘイ
⑤会社をヘイゴウする　18

C　コウシン

①会議がシンコウに及ぶ　②問題をジュッコウする
③失敗のコウサンが高い　④作文をスイコウする
⑤コウリツが悪い　19

D　ハイジョ

①産業ハイキ物　②二律ハイハン
③ハイトウ金が入る　④ガスをハイシュツする
⑤神社のハイカン料を払う　20

E　ヒョウショウ

①ショウヒンを購入する　②森羅バンショウ
③ケンショウに応募する　④ショウメイ書を発行する
⑤作品の一部をショウロクする　21

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ ・ オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア　①重要性　②現代性　③横断性　④有効性　⑤可塑性　22

イ　①経済的　②一義的　③人為的　④表層的　⑤驚異的　23

ウ　①最先端　②商取引　③自虐性　④合言葉　⑤必要悪　24

エ　①大団円　②野放図　③門外漢　④老婆心　⑤絵空事　25

オ　①実行　②流域　③存亡　④感心　⑤文脈　26

問三　傍線部（一）「われわれが体で覚えているような身体感覚が、実は不変的なものではない」ことの具体的な例として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

①人類のほとんどは室外空間では衣服を着用しており、日傘や帽子、サングラスや日焼け止めクリームなどを、人々は臨機応変に身に付けているということ。

②紫外線は鏡などによって屈折する不可視光線であり、社会的・文化的に変化することによって社会のある側面を可視化する力があるということ。

③人々の身体感覚は生物学的な要因だけで決まるのではないため、社会的な要素の影響を受けながら変容していく時間感覚が必要であるということ。

④日差しを浴びることが時には健康のためであったり、時には有害であったり、時には美容の敵であったり、時にはステータスシンボルでもあったりすること。

⑤白色人と有色人の間には日光に対する体質的な相違があって、われわれ日本人は白色人ほど日光の害を敏感にうけとめる必要はないということ。

問四　傍線部（二）人々が「場合によっては太陽光線を遠ざける技術を、そして場合によってはそれを引き寄せる技術を作ってきた」理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

28

①人類のほとんどは人工的な空間の中に居住しており、さらに現代においてはその多くが仕事も人工的な室内空間の中で行っているため。

②紫外線は、〈衣食住〉のすべてと関係しており、医学や栄養学、物理学や化学のような科学分野の影響のもと、人類との関係性も変容してきたため。

③身の回りに存在する自然に対する認識や態度は、人間が自然を知るための科学、そしてそれを利用するためのテクノロジーとは無関係であるため。

④紫外線は目に見える形でその痕跡を人間の肌に残すことから、現代科学の多くが太陽光線と人間との距離を測るためのサイエンスとなってしまったため。

⑤紫外線をめぐって科学・技術の領域について検討することが、化粧品や養鶏、電機やガラス、さらには建築などのテクノロジーを発達させたため。

問五　傍線部（三）「「科学上の権威」の考えも後代にはそれが「誤り」になる」とあるが、そうなった例として間違っているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

①人工的な環境が健康に有益な紫外線をさえぎってしまったこと。
②日差しを浴びることは美容のためになるということ。
③抗生物質の発見以降、薬物療法が広がったこと。
④ニュートンは光を粒子と見なしていたこと。
⑤日差しを浴びることは健康によい行為であること。

問六　傍線部（四）「不可視光線の紫外線が、その変化を可視化してくれるのである」とはどのような意味か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

①紫外線は目に見えない存在だが、目に見える形でその痕跡を人間の肌に残すため、皮膚の状態を通して紫外線との付き合い方を決定することもできる、という意味。
②人類が長い間付き合ってきた、極めて日常的な存在である太陽光線との関係の変容は、実は全人類にとって不変的なものではない、という意味。
③不可視の紫外線は人々の肌に可視的な痕跡を残しているため、これが社会的・文化的、さらには政治的に解釈されてきたのも事実である、という意味。
④身の回りに存在する自然に対する認識や態度は、人間が自然を知るための科学、そしてそれを利用するためのテクノロジーと関係しているのだ、という意味。
⑤紫外線を取り巻く科学知識の変化を検討することによって、時代とともに変化してきた社会的・文化的な価値観を観察することも可能となる、という意味。

問七　傍線部（五）「紫外線（について語ること）がいわゆる「人種」に対してニュートラルではない」という文とほぼ同じ内容を意味しているのは以下のどれか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

31

①紫外線対策をめぐって、太平洋の向こう側の動きに対して、日本でもかつては「先進国」を見習うべきだという意見が多く見られた。

②近年の人類学では「人種」という概念は、むしろ「社会的構築物」であると強調していることを考えると、「人種」という言葉には注意が必要である。

③人類のほとんどは室外空間では衣服を着用しているが、様々な「人種」が身に付ける人工物も、紫外線に対する価値観が可視化される場となる。

④かつての帝国主義的な「文明のヒエラルキー」の中心地から主に発信されてきた紫外線言説は、「人種」言説とも無関係ではなかった。

⑤紫外線に対する価値観には、それぞれの時代における〈現代文明批判〉的な要素が含まれているのであり、いわゆる「人種」という概念とは無関係である。